35

特 253
676

昭和十二年十一月

支那事變

報國美談

（第二輯）

海軍省海軍軍事普及部

37
3

始

特253
676

序

今次事變を繞る各種報國美談は、其都度當部報道班より新聞等に發表して國民精神作興の資料としたが、其散逸を防ぐ爲茲に蒐錄刊行する事とした。

尙事變中なる爲伏字等數多ある點は諒とせられたく、且美談中にも更に追補等を要するものがあると思はるゝが、他日の機會に推敲することにしたい。

ヤ八
ご十郎殿
寄贈
子

支那事變

報國美談（第二輯）

目次

一、軍國の父
（イ）我子の第一線決死出陣志願書……一
（ロ）病床から萬歳、我子の出征を祝して……四
二、勇敢なる航空兵
「勇敢なる水兵」と好一對……七
三、上海愛國女學校に飜る日章旗
亡き部下を思ふ岡野部隊長……一三
四、武人の覺悟
故梅林、山ノ内兩中尉の遺書……一五
五、刑務所内に勃然たる愛國熱……一九
六、機上血達磨、莞爾として勇戰……二〇
七、武人の妻
空の勇士故細川兵曹長未亡人の書簡……二三
八、兗州に散つた肉彈機
第〇艦隊水上機隊の活躍……二八
九、武門の譽、眞木兄弟の奮戰……三三
一〇、彈雨下に戰友を救ふ……三五
一一、敵地不時着機の奮戰……四〇
一二、獻金美談
（イ）嬰兒からの獻金、空の勇士の遺兒……四九

（ロ）名乘らぬ老婆の獻金、明治神宮の神苑にて……五一
（ハ）未知の一婦人からの獻金、南京空爆に感激して……五三
（ニ）七十八歳老婆の赤誠……五四
（ホ）生活苦に喘ぎつゝも集めた慰問袋……五六
（ヘ）遺言狀の獻金を早めて實行、待てども死期未だしと……五八
一三、空の勇士、故吉澤少佐の奮戰史……六〇
一四、肉彈機勇士の遺書二通
故原航空兵曹長と故中山一等航空兵曹……六三
一五、戰の前夜「歡呼の聲に、、、、」の思出に微笑む
故海軍二等兵曹藤井重夫君の絶筆……六七

支那事變 報國美談（第二輯）

一、軍國の父

（イ）我子の第一線決死出陣志願書

尊くも涙ぐましき軍國の母あれば、また天晴れ勇ましき軍國の父あり、玆に一君萬民、忠孝一本の我が國體を顯現せる、いとも勇壯なる佳話が、海軍機關學校長から通報されて來た。

それは同校勤務の海軍三等機關兵細川勝二の實父權次郎氏からの、次の如き第一線決死出陣志願書である。

第一線決死出陣志願書

舞鶴海軍機關學校兵舍第七班

細川勝二印

右之者現今事變第一戰線ニ決死ヲ以テ出陣致度キ旨本人ヨリ申出候間特別ノ御厚意ヲ以テ拔擢御派遣相成度此ノ段別紙家庭歷史書相添御願申上候

昭和十二年九月

現在住所　京都市下京區西七條東野町八番地

親　細川權次郎印

舞鶴海軍機關學校

機關特務少尉　定行七郎　殿

權次郎氏は夙に長男勝二君の海軍兵になつたことを、家門の譽として喜び、勝二君入團以來は常に本人を激勵して、軍人の本分を全うせんことを訓戒して來たが、今次事變勃發するや、我子をして御國の爲御用に立たしめるはこの時と、八月下旬態々機關學校に勝二君を訪づれ、本人を大いに激勵するところあり、歸鄉の上右の如き志願書を提出したものである。

「家庭歷史」として記された所は次の通りで、成程と權次郎氏の烈々たる精神がうなづかれるのである。

原籍　石川縣能美郡鳥越村字上野イ七十七番地

平民　祖先　細川佐助

歩兵　與三次郎

勝二父　權次郎印

水兵　留三郎

兄與三次郎ハ旅順盤龍山東舊砲臺デ明治三十七年九月三十日午後三時三十分戰死弟留三郎ハ東鄉樣ト三笠艦乘組員トシテ明治三十七年二月八日朝鮮仁川沖海戰ヲ初陣

トシテ日本海戰ヲ終リ今尙生存ス
勝二父權次郎ハ其當時海軍志願スル事三回ニ及ベリ然カ申セドモ殘念ニシテ不合格ナリ
非常時ノ今日幸ニシテ倅勝二ハ海軍機關兵甲種合格ノ榮ヲ賜リ上官樣ノ尊嚴ナル御敎授ヲ賜リシ事最早一年二ヶ月ノ星霜ヲ經タリ此上ハ片時モ早ク彼事變第一戰線ニ御派遣ノ榮ヲ賜ラン事ヲ篤望ス

父　細川權次郎
同　勝二

（ロ）病床から萬歲、我子の出征を祝して

事變勃發以來幾度か報國美談に泣かされたが、此處にまた海軍應召兵に關する一美談がある。

美談の主は芝區白金三光町四七八、北林辰治郎氏（五五）で、植木職を業としてゐたが、不幸胃癌に臥し、最近迄巢鴨癌研究所病院に入院中であつたところ、病狀捗々しからず目下自宅に於て療養中である。今月中旬子息良一君（海軍一等水兵）が召集され、十三日横須賀海兵團に入團と決定したので、十二日良一君は巢鴨病院の一室に、餘命幾何もなき父を訪れ出征の挨拶をした。その場の光景を目擊して泣かされた某氏は、感激に涙しながら次の如く語つた。

× × ×

「お父さん、如何ですか今日出征します。元氣で行つて參ります」
良一君は痩せ衰へた細い父の手を握りしめた。
父は落着いた確かりした聲で、
「後の事は心配は要らぬ、お國の爲働いて來い」と我子の面を凝視した。
「お父さん有難う、有難う」良一君はこの言葉を幾度も繰返した。

かくして良一君が、いよいよ病室を出ようとするや、父辰治郎氏は細い兩腕を辛うじて擧げ、萬歳！萬歳！と腹を絞つて叫んだ。

良一君は元氣に、朗かに、何度も「お父さん、有難う、有難う」を繰返して、威勢よく外に出た。

×　　×　　×

父辰治郎氏は三十三年前日露戰役に出征し、奉天の激戰に參加して右股に銃彈を受け、名譽の負傷をした勇士であると云ふ。

丁度この日、不思議にも良一君の長子として男兒が出生した。之を聞いた辰治郎氏は「良一が戰死しても、代りに御奉公する者が出來たから安心、安心」と喜んだとのことである。

一方良一君は家を立つ時に「お父さんが亡くなつても通知はして下さらないやうに、いつまでもあの病室にいられることゝ信じて居させて下さい」と、母に呉々も賴んで行

つたとのことである。

その後間もなく辰治郎氏は永眠したとのことである。

二、勇敢なる航空兵

「勇敢なる水兵」と好一對

海軍一等航空兵　中越健三
同　今村實雄

去る八月十五日、江南の空は暗雲低く垂れ罩めて、視界はやつと一、〇〇〇米位、我が〇〇航空部隊〇〇機は指揮官龜大尉に率ゐられ、蘇州爆撃の任務を帶びて勇躍、初陣の首途に上つた。

その列機の中に、中越一等航空兵を偵察員とし、今村一等航空兵の操縱する艦上〇〇機一機があつた。列機は重疊する雲海のさ中に爆音を包んで、目指す蘇州の上空へ

と向つたが、途中で空襲目標を杭州飛行場に變更しなければならなかつた程天候不良で、視界が狹かつた。

密雲の中で中越、今村の一機は、他の二機と共に本隊にはぐれて、三機で難飛行を續け、漸く杭州喬司飛行場に達した。すると忽ち敵カーチス型戰鬪機とノースロップ型爆擊機の各數機が現れて、密雲下層の低空で壯烈なる空中戰が始つた。

我は忽ち敵カーチス型及びノースロップ型各一機を擊墜し、中越一等航空兵は更に旋回銃を巧みに操作して、他のカーチス型一機を場内に不時着せしめた。

かくして我が三機を以て、敵の邀擊機隊を蹴散らした後、同飛行場に爆擊並に銃擊を加へ、兵舎と折柄待機中の飛行機數機を破壞し去つて、悠々凱旋の途に就かうとした時、後方からカーチス・シユライク型の追擊し來るのを認め、中越機は「好敵御座んなれ」と再び機首を回して敢然反擊に轉じた。激しき空中戰を行ふこと暫時、敵の一彈は中越機の發動機シリンダー及び燃料タンクを貫いた爲エンジンは突如回轉が停つ

てしまつた。中越機は已むなく不時着を決意して、高度二〇〇米位迄降下すると、不思議なことには急にまた發動機が回轉を始め出したので、幸運にも同機は直に姿勢をとり直して上昇した。この間執拗なる敵機の追躡、攻擊を受け、中越一等航空兵は盛に旋回銃を以て應戰し、遂に左胸部に四彈の盲貫銃創を受けたが、彼は些しもひるまず、更に機銃の彈倉を取換へて、その後六〇發を應射した後遂に機上に斃れてしまつた。

敵はこの時、我が僚機の接近を恐れて遁走してしまつたが、この戰鬪中、中越機は僚機と分離して唯一機となつてしまつた。操縱員今村一等航空兵が中越に話しかけるけれども、一向返事がないので、初めて偵察員中越一等航空兵の斃れたことを知り、いかにもして傷ける戰友を早く本艦に連れて歸らうと氣ばかり焦るが、こゝは漠々たる雲海のさ中、肝腎の機の位置が判らず、針路を定めようにも術がない。

今村一等航空兵は、決然「ヨーシッ」と操縱裝置を遣りつ放し、操縱席を這ひ出して

偵察席に乘り移り「中越！」「中越！」と大聲で叫んだ。中越は「オー」と微かに答へて、地圖板を手渡ししようとしたが、それも今は力盡きて座席にハタと落してしまつた。今村は之を拾ひ上げ、再び操縱席に這ひ戻つた。この間操縱者の無い機は盲滅法に飛行を續け、爆音は依然不調で危險この上もない。しかし今村は右の航空圖に依つて針路を定め歸還の途に就いた。

その途中、中越機は偶然にも僚機と合同し、母艦に歸投することが出來た。早速人事不省に陷つてゐた中越一等航空兵を病室に移し、軍醫官が手厚い看護を加へると、忽ち中越は息を吹き返した。

今迄人事不省であつた重傷の中越一等航空兵が、その蘇生の第一聲は、「分隊士、敵のノースロップは落ちましたか、敵もなかなかやりますが弱いですね」「私は大丈夫ですから、第二次攻擊に伴れて行つて下さい」であつた。

尙軍醫官には「大したことはありません、ゆつくり落着いて手當をして下さい」と、

どちらが病人か判らないやうな樣子であつた。

司令官、艦長、副長等から見舞を受けて「好くやつた」と云はれた時、靜かに戰鬪の經過概要を述べたが、今村一等航空兵が次の攻擊準備を整へて「では行つて來るから」と挨拶に來た時、高熱に意識朦朧だつた中越は、ガバと半身を起して「俺も行く、飛行服とバンドを持つて來て呉れ」と言つてどうしてもきかなかつた。

翌日分隊長龜大尉が見舞ふと、

「分隊長ですか、もう何遍攻擊に出かけられましたか、敵の飛行機はもう出て來ないのですか、……それはつまりませんね」

「色々御心配をかけて濟みません。どうかもう二、三日待つて下さい。足は自由になりましたが、胸が苦しくて未だ少し痛みますが、二、三日したらきつと治りますから、又一緒に連れて行つて下さい。かうして私ばかり寢てゐると卑怯者のやうで殘念で堪りません」などと譫語のやうに繰返した。

十八日の正午頃、彼も確實に死期の迫つたのを自覺したらしく、同乘者の今村一等航空兵を呼んで、

「お前のお蔭で助かつたが今日は駄目だ。「迎へ」が來たから俺はもう行く、夕食が終つたら直ぐ來て呉れ、そして搭乘員室の涼しい所へ連れて行つてくれ、皆で一緒に話さうではないか」と言つた。

かくてその日の午後八時、勇敢なる中越一等航空兵は靜かに永眠したのである。

中越一等航空兵
原籍　高知縣高岡郡榛原村
昭和八年佐世保海兵團入團

今村一等航空兵
原籍　熊本縣玉名郡木ノ葉村

三、上海愛國女學校に飜る日章旗

亡き部下を思ふ岡野部隊長

壯烈鬼神を泣かしむる上海海軍陸戰隊の市街戰は、已に五十日に垂んとし前線の士氣は益々奮ひ、毅然として租界の守を堅持してゐるが、去る八月十四日、北部戰線愛國女學校の奪取戰に奮鬪した岡野部隊長は、第〇戰隊首席參謀〇〇中佐宛手記を寄せ、當時の戰況を大要次のやうに報告した。上海市街戰の一場景を眼前に彷彿たらしむるものがある。

× × ×

九月十四日午前九時を期して、頑敵の巢窟愛國女學校の奪取戰を決行した。夜來の雨は名殘なく霽れて幸先佳き絶好の日和である。

假屋中尉の率ゐる〇〇隊と酒井大尉の率ゐる〇〇隊は、二手に分れて豫定の信號火

箭を合圖に、猛然敵陣に突擊を敢行、敵は不意を喰つて一目散に逃走した。酒井部隊先づ女學校の一角に據點を占むるや、假屋部隊機を失せず敵を急追する。小官は後方の陣地に在つて指揮をとり、眼鏡を確と握つてこの光景を凝視する。

あゝ、何といふ我が部下の勇しく尊き姿ぞ。

忽ち飜る紅の日章旗！日章旗をうち振る兵は微笑をさへ浮べてゐるではないか。この沈着、この剛勇、感謝感激に唇が顫へる。次いで櫛比する大厦高樓に、猿の如く馳せ上る一隊又一隊、高所から、又側方から敵を追詰める。この間僅かに數十分間。過去一ヶ月餘、さしもに頑强なる抵抗を續けた敵も、今や我が勇猛に敵し得ず、女學校一帶の地域から掃蕩され、遙かに八字橋、江灣鎭の彼方に逃走した。

今愛國女學校には日章旗が翩翩と飜つてゐる。部下の勇士は休む暇もなく陣地の構築に忙しい。

實に立派な軍隊である。教育訓練の力も偉大であるが、所詮我が國民性、大和魂の賜でなくて何であらう。

唯々一死以て君の爲、國の爲にと戰つてゐるのである。今日程我等は沁々と日本の國に生れたことを仕合せだと思つたことはない。

戰鬪が熄んで愛國女學校の甍の上に、日章旗が飜つてゐるのを仰ぐにつけても、思ひ出されるのは一ヶ月餘も生死を共にして奮戰した鎌田少佐や甲斐中尉が、既に此世にゐないことである。我々は更に勇戰奮鬪、亡き兩部隊長の葬合戰をしなければならない。又第〇戰隊の名譽の爲にも。

どうぞ司令官閣下にこの由御傳へを乞ふ。

昭和十二年九月十四日　午後二時

四、武人の覺悟

故梅林、山ノ内兩中尉の遺書

最近故梅林、山ノ内兩中尉の所屬部隊であつた鹿屋航空隊で、兩人の私室を整理中遺書を發見し、同隊副長から當部宛その寫眞を送付して來た。

梅林中尉遺書

梅林孝次中尉の、書は五通あり出發前夜に認めたもので、その内兩親への遺書の内容は報國美談(第一輯)に掲げた通り、若き空の勇士出陣の覺悟を書留めた烈々たる不朽の文字である。

山ノ内中尉遺書

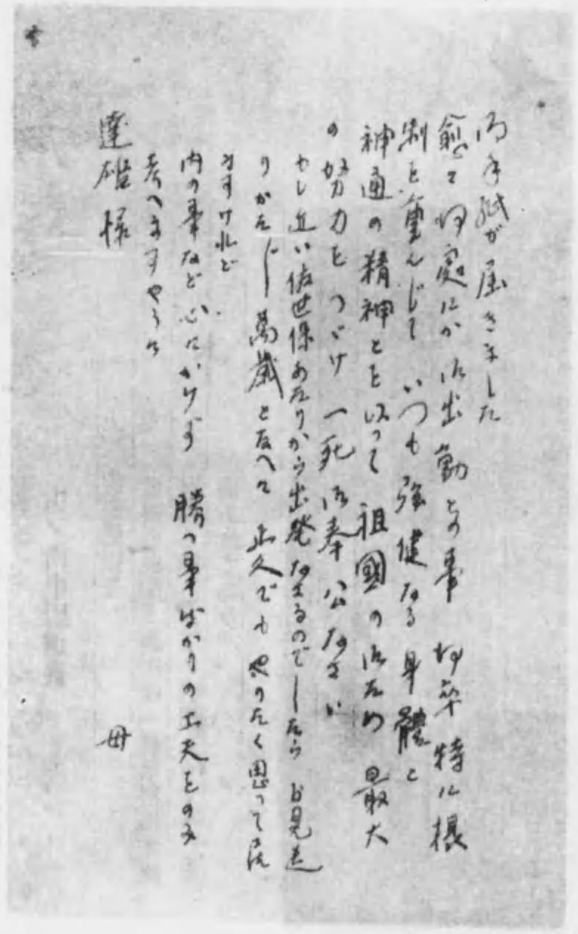
(上) 遺離通知先

(左) 遺書の表記—裏には「航空科機密圖書棚ノ鍵ハ左下ノ引出シニアリ」と書かれてある。

尙山ノ內中尉の母堂が、八月初旬に認められたとおぼしき手紙一通も發見された。
（第一輯「軍國の母」參照）

山ノ內中尉
母堂の手紙

寫眞は山ノ內中尉の遺書と同時に發見された母堂の手紙



五、刑務所內に勃然たる愛國熱

横須賀軍需部では、事變以來海軍被服の製作に忙殺されてゐるので、その一部作業を横濱、小菅、府中の刑務所に依賴し、受刑者に仕事せしむることになつた。

勿論平時でもこの種の作業は課せられ、相當の賃錢が與へられるのであるが、この度の注文に對して、刑務者達は奮然として愛國の熱情に身を顫はし、この時こそ銃後の力として働くのだと誰云ふとなく、この賃銀全部を國防獻金として納めたいと申出て來た。中には平時から貯へてゐた服役中の賃銀をも四十圓、五十圓と投げ出して、獻金に加へて吳れと差出して來た。

海軍當局では、服役中の賃銀は出所後、正業に就く場合の唯一の資本であるから、之だけは大事にして出所後に利用し、他日日本國民として大に銃後の働きをして貰ひたいとの意を傳へ、辭退しようとしたけれども、いつかな承知して吳れず、海軍側も

遂に受納する事にしたとの事である。尙巢鴨の拘置所では、未決囚であるから勞働を強制しない事になつてゐるが、受刑者達は之亦進んで無料で仕事をしたいと申出て來てゐる。

各所共非常なハリ切り方で、横濱刑務所の如きは受刑者千五百名も收容してゐるので、從來毎日一、二件の仲間同士の事件が必らずあつたが、目下そんな事故など皆無で、ひたすら蔭ながら銃後の力として、奉仕したい氣持で一杯であると云ふ。

六、機上血達磨、莞爾として勇戰

海軍航空兵曹長　細川信

過ぐる八月十六日我海軍〇〇空襲部隊の初陣に於て、海軍航空兵曹長細川信は軍艦〇〇、〇〇機隊分隊長機偵察員として勇躍、嘉興空襲の途に就いた。

多數機の陣頭に立ち、暗黑の空を驀進して嘉興上空に達したのは、夜も白々と明け初むる頃であつたが、廣い範圍に亘つて驟雨があり、目標の飛行場は容易に見當らず各小隊も分散してしまつた。

〇〇隊だけで高度を一、五〇〇米—五〇〇米位に迄下げて、彼方此方と雨の中を約一時間も搜索して、やつと攻擊目標を發見した。その時は丁度高度を五〇〇米に下げてゐた時であつたので、急速に高度を取らうとすると敵カーチス・ホーク型二機が、既に我が上空二〇〇米位の所に虎視耽々として待構へてゐるのを發見し、細川兵曹長は之を分隊長に報告すると同時に空中戰の準備を整へ、敵機を一氣に打落してやらうと身構へた。

分隊長はかくと知るや、全速を以て三機凸梯陣の儘上昇、徐ろに右旋回をして襲擊の好對勢に占位しようとした。その時早く敵一番機は我の後方から肉薄し、約六〇〇米の距離から射擊を開始した。その曳痕彈は見事に我が一番機の操縱者、偵察者の前後左右に集中し、敵ながら天晴れなる武者振りであつた。

我も直に應戰、三機の旋回銃の集中威力を發揮中、敵の一彈はグワンといふ音をたてゝ細川兵曹長の彈倉に命中、彈倉の破片は彼の顏面及び右手小指に食ひ込み、右手は痺れて鮮血は機上に四散し、滿面血達磨となつた。列機はもとより猛烈に射彈を浴せかけてゐるが、敵彈も益々激しく身邊に飛んで來る。

細川兵曹長は些しも騷がず、沈着に而も敏捷に左手を以て彈倉を取換へ、再び列機と共に猛烈な銃火を送つた。さしもの敵も傷ついたのか、數發を我が一番機の電信機に打込んだのを最後として、左右にフラフラ機體を搖がし、遂に錐揉みとなつて墜落した。敵の二番機は之を見て忽ち逃走した。分隊長も最後のグワンといふ音と共に左股を擦られたので、偵察員はいかにと振返つて見ると、細川兵曹長は血達磨ながら微笑をさへ浮べてゐるのに安心して、愈々得意の爆擊を敢行、敵機數機を爆破して歸途に就いた。

この空中戰に於て我が一番機は細川兵曹長の負傷の外、電信機を破壞され、傳聲管は二本共操縱席で切斷されたので、前後席の連絡は一尺程の傳聲管の切れ端でやらなければならなかつたが、細川兵曹長は多量の出血を顧みず沈着應急處置を施しつゝ、〇〇に凱旋したのである。

海軍航空兵曹長　細　川　信　略　歷

原　籍	福井縣丹生郡天津村坪谷
現住所	同（妻住所）茨城縣土浦町小櫻町　宮下吉五郎方
生年月日	大正二年四月二十八日
入　團	昭和二年六月一日　吳海兵團入團
現官任用	昭和十二年九月二十六日

七、武人の妻

空の勇士故細川兵曹長未亡人の書簡

前項に詳述した通り、海軍航空兵曹長細川信は、去る八月十六日軍艦〇〇機隊分隊長機偵察員として嘉興空襲に參加し、敵彈の爲に電信機を破壞され、傳聲管を切斷されて而も自らは顏面竝に右手に傷を負ひ、滿面血達磨となりつゝも莞爾として勇戰奮鬪、多量の出血をものともせず、克く沈着に應急處置を施しつゝ〇〇に凱旋し、天晴れ武勳を讃へられたが、その後月餘九月二十二日には、廣東空襲の壯擧に參加し、武運拙く敵彈を受けて愛機もろとも南支の空に華と散つたのである。生くるも死ぬも戰場の習はしとは云ひながら、若き空の勇士の最期こそは壯烈悲壯である。

この程吳海軍人事部長宛、故細川兵曹長の未亡人から、次のやうな健氣にもまた涙ぐましき手紙が寄せられた。さすがは武人の妻たる大和撫子と泪をそゝるものがある。

× ×

拜啓　私事去る九月二十二日南支方面に於て戰死致候細川信の妻相子に御座候、夫信儀出征に當り申し殘し候事は、「生きて凱旋などは望まず、腕の自由なる限り、足の働く限り、內地に還らぬ覺悟、戰死の報を待つて吳れ、戰死と聞かば直に代つて、人事部長殿、長官閣下へ、忘れずに御禮を申し述べよ」との言葉にて候ひしが、部長樣私は今笑つて華と散り候夫の言葉に從ひ、亡き夫に代つて御禮を申上度この書認め奉る次第に候、軍人の妻としてこの上もなき光榮と存じ候、細川が今日この名譽あるつとめを盡し得たる事は、あなた樣をはじめ上官先輩の方々日頃の御情深き御指導の賜と厚く御禮申上候

この言葉何卒細川の生ける御挨拶として御受け被下度願上候

去る八月廿四日附夫の手紙には

「十六日の初陣で敵戰鬪機を擊墜した、實にうれしかつた。この壯烈な空中戰で右手に彈丸突入、彈をとらずに縫ひ、この頃では傷もやうやくようなつた。明日からは又敵機を墜しに行く」との便り有之、初めて夫の負傷を知ると同時に、再起の報を得て二

重のよろこびに浸り、たゞひたすらに甲斐ある御奉公をと祈り居り候

去る九月八日附の手紙には

「元氣で痛快な空中戰鬪に從事してゐる。御存じの西脇中尉殿、岡田一三兵曹長殿は去る八月二十七日名譽の戰死を遂げられました。遺憾措く能はざる所なるも男子の本懷これに過ぐるものなかるべく、寧ろ羨しい。日頃の訓練はこの檜舞臺をめあての事だ。幸にして其の機に遭遇したことを衷心よろこぶ。若し敵彈に斃れたら一家一同喜んでくれ、決して其の機に遭遇したことを衷心よろこぶ。若し敵彈に斃れたら一家一同喜散り、護國の靈は高く天に居て、皆の喜ぶ聲を微笑んで聞くであらう。武運の續く限り奮鬪する。私亡き後は遺言通りにしてくれ、では明日の戰鬪を夢に見ながら休む」と御座候、紙川よりの書面は次に十四日附を以て絶筆と相成候

「其の後傷も治り、先月下旬より再び戰鬪に從事してゐる。武運のある限り奮鬪する覺悟、右手突入の彈片はやがて平和の光明輝く折までの土產とする。今日は西脇中尉

殿、岡田兵曹長殿の告別式あり、ありし日のことを思へば涙新たなるものあり、これも暴戾なる支那軍のなせる業と、切齒扼腕、唯私の胸は皇運萬歳を祈ると同時に先輩の仇討の決心あるばかり、本懷を遂げる日も近きにありと確信する。暴支膺懲のため戰ひつゝ」とこれが夫細川信の最後の言葉にて御座候

部長樣私も軍人の妻としての覺悟はかねて承知致し居り、夫の心を心として御國の爲と祈り居り、夫よりの手紙の度に……(中略)昨日細川が名譽の戰死と承り候時は、かねて覺悟のことなれば決してかなしみ候はず、望み通り花々しき御奉公にさぞや夫も氣輕に昇天せし事と、その心を察しやるまゝ、私事も重荷をおろしたるが如き心地いたし候、部長樣かくして細川は喜んで華と散り甲斐ありしをよろこびつゝ、その魂は清々しき秋空に笑を含んで故郷に向ひ居ることゝ存申候、私事夫の寫眞に向つてしみじみと禮を申し、遺言堅く相守り遺されたる一子をせめて人らしく育て上げんと誓ひ申候

細川の心根何卒御ほめやり下され度願上候、重ねて細川生前の御めぐみ深き御指導厚く御禮申上候、甚だ勝手がましき御願には候へども別封書、長官閣下御手許にまで御差上げの程伏して願上候　草々不備

九月二十五日　　茨城縣土浦町小櫻町實家宮下吉五郎方

人事部長　奥　信　一　様　　亡　細川信妻　相　子　拜

八、兗州に散つた肉彈機

第〇艦隊水上機隊の活躍

海軍航空兵曹長　阿　部　利　雄（偵察員）

海軍三等航空兵曹　櫻　澤　佐　金　吾（操縦員）

昭和十二年九月二十二日、第〇艦隊水上機隊〇〇機は、敵の北支戰線への動脈を切斷すべく、午後二時二十五分栗本少佐指揮の下に、翼を連ねて勇躍、支那山東省兗州爆擊に向つた。前記兩名もその一機に搭乘し、僚機と共に戰友一同の拍手に送られて離水した。

兩人は出發に臨み、戰友一同の拍手に擧手の禮を以て答へ、ニッコリ微笑んだ眉宇には固き必勝の信念が溢れて居た。

艦隊を離れた水上機隊は、澄んだ秋晴の空に銀翼を連ね、見事な編隊を作つて西へ西へと進み、瞬く間に支那國土上空に達した。海州や臨沂では敵高角砲の射擊を受けたが、何等の被害もなく、尙も進んで孔子に名高い曲阜を下に見、午後四時愈々兗州の上空に到着した。

指揮官栗本少佐の搭乘機先づ敵の機關車を爆擊すれば、將に出發しようとして居た機關車からはパッと白い蒸氣が爆發した。之に倣つて各機交々貨車、倉庫及機關車等、敵の軍事輸送機關の爆擊を開始した。

阿部機は小隊長常岡中尉搭乗機の爆撃終るを見て貨車に向ひ、猛烈急降下爆撃に移つて行つた。

然るに何たる事ぞ、飛び來つた敵彈の一つは阿部機の燃料タンクに命中し、忽ち火災を起した。火災は見る見る裡に機體全部を包んで、全く火達磨となつてしまつた。今は之までと決意した兩人は「天皇陛下萬歳」を叫びつゝ、燃えしきる愛機の中にあつて凛然沈着、固く急降下の態勢を持し、爆彈を抱いて驀進突入、轟然貨車に衝撃之を木ッ葉微塵に粉砕し、遂に肉彈となつて散つた。時に午後四時十一分であつた。

小隊長常岡中尉は第二回目の爆撃を終るや、阿部機の衝撃地點を具に偵察したが、其處には最早阿部機の姿は無く、兩勇士の肉彈に打ち砕かれた敵の機關車より噴出する眞白い蒸氣のみがあつた。

嗚呼空の若鷹阿部、櫻澤兩勇士は、最後迄旺盛な攻撃精神に燃え、愛機絶望と見るや敢然肉彈爆撃の壯擧を決行、遂に山東の花と散つたのである。

この二勇士の忠勇壯烈なる戦死の報告を受けた第〇艦隊司令長官吉田中將は、直に官等一級を進め、且軍人の龜鑑として次の如く表彰し、全軍に之を布告した。

表彰

軍艦〇〇乘組

海軍航空兵曹長　阿部利雄

海軍三等航空兵曹　櫻澤佐金吾

右者〇〇艦上機ニ搭乘シ本日ノ兗州空襲ニ參加シ其ノ上空ニ達シ急降下爆撃ノ姿勢ニ轉ズルヤ適敵彈ノ爲其ノ機ハ火ヲ發スルニ至レリ

而モ兩名ハ死ニ直面シテ猶攻撃ノ意志ヲ捨テルコトナク其ノ目標ニ驀入愛機ト共ニ肉彈爆撃ヲ決行シ最モ壯烈ナル戦死ヲ遂ゲタリ

右ノ行爲ハ旺盛ナル攻撃精神ノ發露ニシテ其ノ忠勇ハ寔ニ以テ軍人ノ龜鑑タリ

本職ハ深ク其ノ勇武ヲ表彰ス

昭和十二年九月二十二日
第〇艦隊司令長官海軍中將正四位勳二等　吉田善吾

海軍航空兵曹長　阿部利雄略歴

原籍　福島縣相馬郡磯部村大字磯部字芹谷地四〇六番地
現住所　軍艦摩耶（戰死當時ノ所轄）
生年月日　明治四十三年二月二十一日
入團　昭和三年六月一日　横須賀海兵團入團
現官任用　昭和十二年九月二十二日　任海軍航空兵曹長（特殊任用）

海軍三等航空兵曹　櫻澤佐金吾略歴

原籍　群馬縣群馬郡上効村大字井出九番地
現住所　軍艦摩耶（戰死當時ノ所轄）
生年月日　大正四年十月三十日
入團　昭和八年五月一日　横須賀海兵團入團
現官任用　昭和十二年九月二十二日　任海軍三等航空兵曹（特殊任用）

九、武門の譽、眞木兄弟の奮戰

海軍大尉　眞木成一（兄）
海軍中尉　眞木定次（弟）

海軍少將（退役）眞木俊魁氏を父に持つ二人の兄弟、兄は海軍航空隊空の勇士として、弟は陸戰隊の若武者として、うち揃つて上海戰線の空と陸に奮戰中であつた所、眞木中尉は去る八月二十九日、可惜江南戰線の華と散つた。

同中尉は今村（正治）隊（九月七日今村中尉戰死）に屬し、事變勃發以來勇戰奮鬪した殊勳の士であつたが、去る八月二十八日上海戰線最北端陣地の要地たる〇〇を死守、屋上にあつて指揮を執り奮戰中、三方面よりする敵の集中砲火を浴び、敵迫擊砲の一彈飛來つて、部下數名と共に傷つき、一應は手當の爲後方に退いたが、敵の攻擊は愈々猛烈を極めて來たので、同中尉は部下の苦戰を思うてゐたゝまらず、傷つける身を

おして戰線にとつて返し、數倍の敵を相手に奮戰、折しも敵の移動機關銃隊を發見して之を猛擊中、又もや敵の迫擊砲彈を受けて壯烈なる戰死を遂げたのである。時に八月二十九日午前一時四十分。

眞木海軍中尉

兄成一大尉は愛弟の弔合戰の機會を待つてゐたが、遂に十月四日選ばれて閘北の敵陣爆擊に參加、一彈一彈愛弟の俤を瞼の中に描きつゝ果敢なる空襲を行つて敵陣を粉碎、心ゆくばかり愛弟の弔合戰を果したのであつた、

成一大尉夕刻一日の任務を終へて飛行服を脱ぐや、駈けつけたのは石油公司の入口近く、弟定次中尉が名譽の戰死を遂げた地點に建てられた木牌の前であつた。

成一大尉は愛弟の隊長古田部隊長の案内で牌前に到るや、默禮少時「弟よ、よく遺つた、仇は兄が討つたぞ」と物言はぬ木牌に話しかけてゐた。

海軍中尉 眞木定次 略歷

原籍	東京市目黒區下目黒八五一
現住所	東京市目黒區下目黒四ノ八五一（父ノ住所）
生年月日	大正二年七月六日
入校	昭和七年四月一日
現官任用	昭和十二年八月二十九日

一〇、彈雨下に戰友を救ふ

海軍三等水兵　奥山貴雄

同　小崎友三郎
同　小西貞夫
海軍三等機關兵　黑木光良

十米、二十米と云ふ至近の距離に相對峙して、互に或は土嚢を楯に、或は物蔭から撃ち合ひ、時にはコンクリートの壁一重隔てゝ手榴彈を投げ合ひ、最後に肉彈を以て突撃を敢行するのが上海市街戰の特異性である。かゝる狀況の下にあつて、文字通り彈雨を冒して陣地を構築したり、傷者を運搬したり、補給作業其他を遂行したりすることは、敵と直接戰ふこと以上に決死の覺悟を要し、眞の勇者でなければ出來ないことである。

去る九月十六日の事、天通庵路橋附近に奮戰中であつた岩淵小隊は頑敵を撃破し、こゝに陣地を構築することになつた。

この間敵は絶えず執拗なる逆襲を反覆して來る。陣地構築半にして敵はすぐ側の家屋の蔭から一齊に機關銃の猛射を浴せて來た。陣地作業員は素早く未完成の陣地に着いて應戰した。この場合陣地が未完成なので土嚢一個でも欲しい時である。造りかけの土嚢は陣地の後方にあるが、一歩陣地を出れば敵彈が集中されるのである。この時海軍三等水兵奥山貴雄は、決然として土嚢運搬の爲陣地を出ようとした。忽ち飛び來つた一彈は奥山三等水兵の頭を射拔いて、彼は朱に染つてその場に昏倒した。

傍らにあつた海軍三等水兵小崎友三郎、海軍三等水兵小西貞夫、海軍三等機關兵黑木光良の三人は駈寄つて奥山を抱き起した。早速假繃帶を施したが、さてこの重傷者を後方へ運ぶのには敵彈を冒して陣地を飛び出さなければならぬ。奥山は既に助かる見込のないことは素人眼にも明らかである。だが、どうしてこの戰友を見捨てゝ置かれようか、三人は決死の覺悟を決め、瀕死の戰友を抱き陣地を蹴つて出た。心なき敵彈は益々この四人に集中される。しかし味方部隊の猛烈なる反撃と天の情とに依つて、決死の三人は戰友を無事後方に運ぶことが出來た。直に軍醫官に依つて手當が施され

たが、重傷の奥山三等水兵は間もなく永眠した。だが、その臨終は友情厚き三人決死の戰友の腕に抱かれて、雄々しく護國の神となつた。彼としては定めし本望であつたであらう。

海軍三等水兵　奥山貴雄略歴

原籍　愛知縣海部郡飛島村大字新改成三〇九
現住所　同
生年月日　大正八年六月十九日
入團　昭和十一年六月一日
現官任用　昭和十一年十一月十五日

海軍三等水兵　小崎友三郎略歴

原籍　島根縣美濃郡小野村大字喜阿彌ィ一〇七一
現住所　同
生年月日　大正四年十月七日
入團　昭和十一年六月三十日
現官任用　昭和十一年十一月十五日

海軍三等水兵　小西貞夫略歴

原籍　大阪府中河内郡堅下村大字太平寺四四一
原住所　同
生年月日　大正三年十二月九日
入團　昭和十一年六月三十日
現官任用　昭和十一年十一月十五日

海軍三等機關兵　黒木光良略歴

原籍　香川縣綾歌郡長炭村大字炭所西一八九五
現住所　同
生年月日　大正七年三月十五日
入團　昭和十一年六月一日
現官任用　昭和十一年十一月十五日

一一、敵地不時着機の奮戰

海軍航空兵曹長　金田吉一
海軍二等航空兵曹　諸田外男
海軍三等航空兵曹　松村春一

我が海軍航空部隊は、豫てより我が陸戰隊を惱まして居る上海北停車場の列車砲及商務印書館の機銃陣地の爆撃命令を受けて、八月十七日午後三時、六機銀翼を連ねて一路上海に向つた。

上海上空に來り斷雲の絶え間から下界を覗くと、果して停車場引込線上に迷彩を施した列車砲竝に裝甲列車數輛を發見した。

小隊長は直に突撃下令、急降下爆撃に轉じた。第一彈の大型爆彈は列車砲の五米位手前で物凄い爆音と共に炸裂して列車は轉覆し、鐵道線路はヒン曲つた。列機も續いて爆撃を決行、片ッ端から目標は爆破されて行く。列機の爆撃は繰返されつゝある。商務印書館附近からの地上防空砲火は盛に機邊に炸裂する。この時海軍二等航空兵曹諸田外男操縦、金田吉一航空兵曹長竝に三等航空兵曹松村春一を搭乘員とする一機は、突如ドン！といふ相當大きな衝撃を感じた。最初は僚機の投下した爆彈の衝撃かと思つたが、よく見ると水か、ガソリンか、盛に漏つて霧のやうに飛散してゐる。

急に機關の爆音は不調になり、機體の震動が大きくなつた。放熱器かシリンダーの邊りを相當ひどく敵彈にやられたらしい。とうとう發動機からも黑煙を吐き出した。

諸田兵曹は遙かに黄浦江上に浮ぶ旗艦出雲の雄姿が目に入つたので、斷然江上に不時着を決意した。

搭乘員は準備にとりかゝつた。高度は次第に低下し、振動は益々激しくなつた。あと出雲迄四、〇〇〇米だと思つた瞬間、エンジンはパタと停止した。その時高度は二〇〇米位、出雲の附近迄空中滑走は到底不可能だ。萬事休すと思つたが、ふと眞下を見

ると美孚石油會社(スタンダード會社)の側に青い芝生のグラウンドがある。グラウンドは東西五〇〇米、南北一〇〇米位の廣さで、眞ン中に排水溝がある。而も周圍には厚さ三〇糎、高さ二米半位の頑丈なコンクリートの壁がある。だが今はこのグラウンドに向ふより外に仕方がない。高度はグングン下る。機は追風のまにまにグラウンドに向つてゐるので、壁までにはとても停止しさうにもない。

やがて前の車輛が地に接したと思つた瞬間、機體はコンクリートに擊突、壁を破り、場外の道路の並木に突き當つてやつと行脚が止つた。しかし車輪は飛び、翼はピシャンコになり、愛機は哀れにも無殘な姿となつた。

松村兵曹は血達磨となつて倒れてゐる。金田兵曹長が「皆大丈夫か」と叫んだ。

諸田兵曹は元氣に機内から出て來た。

轟々たる銃聲から判斷して此所は敵陣地の間近である。死は素より覺悟の上ながら、兵器や秘密書類を敵に奪はれてはならぬ。

「ヨシ、火をつけるぞ。あとは彈のあるつたけ擊ち盡して戰死だ」と金田兵曹長の凛たる聲に、今迄翼の上に伏してゐた血みどろの松村兵曹もガバと起ち上つた。金田兵曹長は自ら諸田、松村兩兵曹に機銃彈倉を渡し、兩人は之をグラウンドの中央小高い所まで運んで、急造の機銃陣地を構へた。邊りを見廻すと、四圍の壁の間から保安隊らしい輩やモップが、ワイワイ押し寄せて來るので、松村兵曹は機銃を、諸田兵曹は拳銃を以て威嚇射擊をする。その間に金田兵曹長は飛行機を燒却せんものと、頻りにマッチを搜すが、なかなか見當らない。信號拳銃を利用しようとしたが、これも見つからない。やつと小さなマッチのスリ紙の端片と三本のマッチの軸を發見した。南無三！三本のマッチ、これで失策したら大變と、愼重にガソリンを布片に浸して、暗號書その他秘密に屬する品々一切を座席に取纏めて、これに點火した。飛行機はメラメラと物凄い炎と共に、濛々たる黑煙を擧げて燃え上つた。今迄機銃の所に居た二人も駈け寄つて來て誰が發聲するともなく、三人異口同音に遙かに東天を仰いで「天皇陛下萬

歳」を三唱した。

三人は煙と消え行く愛機を見守りながら、少時敵地にある事も、人間一切の妄念も打ち忘れてゐた。

「悲壯な靈感に打たれた」とは彼等の後日述懷したところであつた。

三人は殘彈を撃ち盡してこの青芝生を褥に戰死を誓つた。この世の生命は餘すところ分秒に迫つてゐながら、諸田兵曹は負傷した松村兵曹をいたはり、顏面の裂傷に手當を加へ繃帶をしてやつてゐる。

機銃をおつとり邊りに氣を配つてゐるが、敵は襲撃して來さうもないので三人は鼎坐して考へた。「天は未だ我等に死を課せず、我等の爲すべきことは殘つてゐるのだ。凡有る手段を盡して危地を脱しよう、此所にゐても仕方がない。早く黃浦江岸の棧橋まで出ようではないか」と、群がる支那人を威嚇しつゝ江岸指して行く程に、突如ドカーン！と一大音響、振返つて見ると愛機の燒跡から黑煙が立ち上つてゐるではないか、

もしや空爆かと、大空を仰いだが、たゞ白雲の悠々たるを見るばかり、さうだ、不時着爆彈の殘彈を全部落したつもりであつたが、一彈が殘つて居つて、それが飛行機燒却の際過熱されて自爆したのである。しかしこれも役に立つた。群がる暴民達はこれに驚いて一目散に逃げ去つた。

天は未だ我等を見棄てずと愈々三人は力强く感じた。

石油會社の屋上には星條旗が翻つてゐる。外人が一人恐る恐る近寄つて來た。三人は拳銃を撃つのをやめて手招ぎした。

ブロークン・イングリッシュで委細を話し、兎に角鍵をはづさせて圍ゐの外の黃浦江岸に出た。遙か江の上流にも下流にも我が軍艦のマストに戰鬪旗が翩翻とはためいてゐるのが見える。こゝまで來ればもう大丈夫ではあるが、何とかして早く歸艦して皆に安心させたいと思つてゐる所へ、先の外人が來て、こゝは米支合資だから早く退いて貰ひたいとの旨を盛に喋り立てる。江上を走る外國汽船に手旗信號をやつても近

寄つては吳れず、銃を出して威嚇すれば尙更速力を出して逃げてしまふので、救助される望みもなく、自力で辿りつく決心をした。日も暮れたので松村兵曹は機銃を擁して見張番をなし、金田兵曹長と諸田兵曹とは舟を搜しに江岸づたひに拳銃を擬して出かけて行つた。二人の行手の支那人達はおそれて逃げる。窓から首だけ出して何事かひしめき合つてゐる手合も拳銃を向けると引込んでしまふ。やがて石油會社のポンドに出た。そこには大小の船が繫いであるけれども皆星條旗を揚げてゐる。

然し窮餘の一策として手頃の小舟を借用に及ばうとすると、又ぞろ支那のモップがワイワイ騒いで押し寄せて來る。拳銃で彼等を追拂ひながら、どうやら舟を手に入れる見込がついたので、負傷してゐる松村兵曹を迎へに引返した。

折から「オーイ、オーイ」と大聲で呼ぶものがある。見ると我が軍艦旗も鮮かに、下江し來る一艘の內火艇、武裝ものものしい陸戰隊員の乘つてゐる集の內火艇である。もう大丈夫と今迄の緊張した顏面神經が一時に緩んで三人は顏を見合せて莞爾とした。

次の瞬間熱い泪が頰を傳つて流れてゐた。

先に彼等の不時着を目擊した隼では砲術長を指揮官とし、救助隊を編成して救助に向つたのであつた。

かくして奇しくも三人は玆に軍艦旗の下に生還することが出來たのである。さうだ「天は未だ我等に死を課せず、我等の爲すべきことは殘されてゐるのだ」然り三人は今江南の空に愈々活躍を續けてゐるのである。

八月二十七日〇〇艦長は三人の勇敢沈着な行爲を表彰した。

海軍航空兵曹長　金田吉一略歷

原籍　愛知縣北設樂郡田口町大字八橋一〇
現住所　同縣同郡新城町橋向　福田淺吉方
生年月日　明治三十七年二月十六日
入團　大正十三年六月一日

現官任用　昭和十年十一月一日

海軍二等航空兵曹　諸田外男略歴

原籍　石川縣金澤市安江町貳番町二三番地ノ六
現住所　同
生年月日　大正三年七月二十八日
入團　昭和五年六月一日
現官任用　昭和十一年五月一日

海軍三等航空兵曹　松村春一略歴

原籍　山口縣都濃郡花岡村三五四屋敷
現住所　同
生年月日　大正二年二月六日
入團　昭和七年六月一日
現官任用　昭和十一年十一月一日

一二、獻金美談

（イ）嬰兒からの獻金、空の勇士の遺兒

福島縣相馬郡小高町佐山翼君から海軍將兵慰問金にと、五圓の小爲替が海軍省恤兵係の許に送られて來た。

翼君は昨年十二月に誕生したばかりで、然もお父樣を知らない赤ちやんなので、お母さんの咲子さんから、愛國の赤誠に燃え、熱情あふるゝばかりの手紙が添へてあつた。

それによると翼君のお父さん、佐山理氏は館山航空隊の三等航空兵曹であつた。昭和十一年六月二十六日、横須賀鎮守府の基本演習に參加して九二式艦上攻擊機に搭乘して演習中、不幸にして機體の故障から千葉縣安房郡神戸大神宮山林中に墜落して殉職した。

その時は翼君はまだ咲子さんのお腹にあつたのだが、葬儀後咲子さんは郷里福島縣に歸郷した。そして生れたのが男だつたので、夫君が航空兵だつたのを偲び「翼」と命名した。

「翼が大きくなつたら、立派な海軍々人にします」

と、今は亡き夫君の寫眞を掲げた佛前で、朝な夕な之を誓つてゐる。

この母親の心知つてか、翼君は海軍マーチや飛行機が大好きである。廻らぬ舌で父を呼ぶ可憐な子は、母乳がなくてミルクで育つてゐる。

そのミルク代は官から支給されてゐるのだが、もう翼君も輕いお菓子や御飯を戴く樣になつたので、翼君のミルク代を獻金するとて送つて來たものである。

係官もこの切々たる、涙の出る樣な文字を以て綴られた手紙に感激、感謝して、海軍機製作金の一部に加へた。

（ロ） 名乘らぬ老婆の獻金、明治神宮の神苑にて

明治神宮に奉仕する宮司有馬良橋氏の代理人として、秋間權宮司、職員岡田武治氏が海軍省を訪れ、次の樣な奇特な老婆の感激美談を持つて來た。

職員岡田武治氏が毎朝の務めで、神苑を巡回し、東御門の前に差しかゝつた際に、六十歳位で服裝も左程立派でもない老婆が、突然に立塞つて、

「明治神宮の職員の方と思ひます、どうぞこれを兵隊さんにあげて下さい」

と、十圓紙幣を鷲づかみにして百五十圓を差出した。

岡田職員がそれを受取ると、尙風呂敷包から五圓札、十圓札を取交ぜて百三十圓を差出した。

岡田職員は餘り突然の事ではあり、取扱ひにも困るので住所と名前をきくと、「きくといふ女です」と答へた。

同氏は社務所へ取敢ず報告すべく、老婆を待たして駈け出した。

社務所では有馬宮司以下協議し、この奇特な老婆の行爲を受ける事になり、東御門前に迎へに行つた所、既に老婆の姿は見えなかつた。

そこで社務所で協議の上、百三十圓を海軍將兵慰問金の一部に加へてもらひたいと獻金に屆けて來たものであるが、この奇特な老婆は住所も名前も判らないが、時局重大なとき皇軍のため、明治神宮に參拜し、その歸途社務所を訪れず、東御門脇で職員が出て來るのを待つてゐたものであると。（七月廿八日）

（八）未知の一婦人からの獻金、南京空爆に感激して

夏の日の直射を浴びて、全身汗でぬれ鼠となつて海軍省を訪れた青年が、

「これをある奥樣から頼まれました」

と、手紙と封筒を置いて立去つてしまつた。

係官が手紙の封をきると次の樣な熱血あふれ胸を打つ樣な文字が綴られてあり、封筒の中には純金指輪二個と、三越商品切手五十圓が封入されてあつた。（原文のまゝ）

× × ×

十八日（八月）我が海軍機長驅南京を襲擊多大の損害を與へた號外本當に何と感謝申上げてよいか、號外を掴んだまゝ「どうなの？」といふ家族の者に直ぐ讀めませず思ひきつて出した聲は細くて泣聲でした。とても讀み續けませんでしたので、目の前にひろげてしまひました。こんな嬉しい事はありません。

この有難さ、嬉しさ、もうどうお禮を申上げてよいか判りません。

何かお禮のしるしにと、自分の廻りのものを見廻りました。

目につきましたのが、この二つの指輪でした。

これは本當にお粗末ですが、私に澤山の幸福を持つて來て呉れましたので、どうぞ獻金の一部にお加へ下さいますやう謹んでお願ひ申上げます。

尙商品切手は將兵の方々にお菓子でも買つて上げて下さい。

と、胸をさす切々の言葉が、水莖のあとも麗はしく認めてあつた。

所も判らず、名も判らない、この婦人の貴い赤誠に係官もいたく感謝した。（八月十八日）

（二）七十八歳老婆の赤誠

朝早く海軍省恤兵係を訪れた老婆は、よごれた財布の中に、大事さうに包んだ紙包の中から、小さく折つた五圓札二枚を「慰問金にして下さい」と差出した。

この老婆が更に言葉をついで言ふところは、次の如くで、係官も思はずホロリとさせられた。

「これは私の死んだ時の寢棺の費用にと大事にとつて置いたものですが、私も二、三年は死にさうにもありませんし、聞けば國家は非常時ださうですから獻金します」

といふのであつて、この老婆は麻布區網代町一七原田いしさん（七八）といふ奇特な人であるが、聞けばその家庭は眞に可哀さうな狀態なので、係官は

「海軍としては、その貴い御精神を載くだけで結構ですから、思ひとゞまられては如何ですか」

と一應辭退すると、

「老人の事でお金もいりませんから」

と答へた。そこで、

「では半分にされては如何ですか」

と三度問ふと、

「甚だ僅少ですが、そのまゝ納め

海軍省に於ける原田いしさん

て載きたいと思ひます」

と言ふので、係官もこの赤誠を受けることになつた。

この老婆の倅（四三）さんは八年前から精神に異狀を呈して松澤病院に入院してゐる。このために嫁は二兒をおいて實家へ逃げ歸つてしまつた。

老婆は孫（一九）と（一五）の二人を奉公に出し、自分はマッチや洗濯石鹸を行商して細い生活をしてゐる。

町内の人や、方面委員の人達にも、何かと御世話になつてゐるので、この擧に出たと云ふのであるが、聞けば聞く程の赤誠に係官もすつかり感激してしまつた。（八月十四日）

（ホ）生活苦に喘ぎつゝも集めた慰問袋

世田谷區千駄ヶ谷五丁目九九六の長屋に住む三十世帶の人々は、全くその日暮しの

眞心籠め慰問袋を差出す江部さん達

者ばかりである。

この爲に町内でも、町會費、衞生費、寄附金等の凡て金の出る事は一切遠慮してゐる有樣である。

所が今回の事變で江部彌吉さん他三名が

「かやうな時に國家に御奉公を致さなければ日本國民として價値がない」

と、時局を認識して長屋に檄を飛ばした結果、二十個の慰問袋が出來上つた。そこで代表者四名が海軍省を訪れて、

「私達の生活狀態ではこれで精一杯です。どうぞ海軍將兵の爲に送つて上げて下さ

い」

と差出したので、係官もこの血の出る様な零細な金で出來た慰問袋に、厚い感謝の意を表した。（八月三日）

（へ）遺言狀の獻金を早めて實行、待てども死期未だしと

横濱市中區宮川町三の七七退役獸醫中尉從七位勳六等功五級石堂平三氏（六三）は一昨年動脈硬化症で、醫者からすつかり見離されてしまつた。

常日頃愛國赤誠の念に燃えてゐる同氏は、一命を危ぶまれるに至つては如何にして國家に御奉公すべきかと種々考へた末、自分が死んだ後は陸海軍に對して一千圓宛の獻金をすることを決意し、遺言狀の一項目にこの旨を認めて居いた。

これで自分が死んでも報國出來ると安心しながら、一方には養生を怠らなかつた。運命の神も、この赤心に感激してか、一度は危ぶまれた氏の病氣も次第々々に快方

に向つて、一年は過ぎ、二年は過ぎて、けふこの頃は無理は出來ないまでも、床離れが出來る樣になつた。

時に時局は益々重大化し、事變も擴大して來たについてぢつとしてゐられず、病氣の身をわざわざ横濱憲兵分隊に運び、林隊長（現東京憲兵隊副官、憲兵少佐）に面會し、

「倅達も既に一人前になつて單獨の生活をしてゐて心殘りはない。

自分は死を覺悟して遺言書に獻金の事を認めて待つたが、その日がまだ來ない。國家非常時の場合に遺言書の事を云々してゐられなくなつたので、遺言書の分とは全然別に獻金したい」

と二千圓を差出した。

林隊長もいたくこの赤誠に感激して、內千圓をもつて海軍省を訪れ、海軍國防費に獻金し、この美談をもたらした。（九月二十三日）

一三、空の勇士、故吉澤少佐の奮戰史

本輯第六、「機上血達磨、莞爾として勇戰」の記事中「分隊長」とあるは指揮官故海軍少佐吉澤政明であつた。同少佐は終始細川兵曹長と共に活躍し、九月二十二日かの廣東大爆擊に際し、兩名は遂に廣東上空に於て壯烈なる戰死を遂げたのである。

それまでに吉澤少佐は空中戰鬪に從事すること實に二十七回、その大部分は空襲隊の指揮官として、その陣頭に立つて勇戰奮鬪、天晴れなる武者振りを示したのである。

その戰鬪振りは、一言にして云へば勇猛果敢、堅忍不拔の一語に盡きる。見て居るものをして手に汗してハラハラさせた。「餘り低空に降りると危いぞ」と僚友から心配されたことも屢々であつた。

吉澤少佐は烈々たる攻擊精神の持主であつた。

敵飛行場、敵陣地等の爆擊に際しては、眞に一發必中であつた。支那軍は誤魔化しの名人だけあつて、飛行機は全部格納庫から出して飛行場內此處彼處にバラバラに、而も巧みにカモフラージしてゐる爲、上空からは往々にして見えないことがあり、又模型飛行機を置いて欺く場合もある。こんな時には見事格納庫に命中しても發火しないので、少佐は齒ぎしりして敵飛行機を低空偵察し、もし迷彩機でも發見しやうものなら、地面すれすれまで下降し、之を破壞して歸つて來るのであつた。

だから愛機の翼に數發乃至十數發の彈痕を發見するのは、何時ものことであつた。

八月二十七日部下の西脇大尉が戰死してからは、必ず仇をとるぞと言つて全く二人分の働きをして居た。

我が大空襲を豫知した敵は廣東の防空監視網、防空陣を愈々固め、我が隊が上空に現はるゝや一齊に砲門を開き、我が隊は忽ち敵の彈幕に掩はれたやうに見えた。少佐は先頭に立つて悠々彈幕を突破して、頃はよしと突擊を命じた。各隊は弓を放れた矢のやうに敵陣目がけて殺到したと見るや、無念、少佐の愛機の後方から白煙が上つた。

少佐はもはやこれまでと思つたのであらう。抱いて居る爆彈を敵陣目がけて投下した。それと見る間に機は火焔に包まれ、少佐は愛機諸共敵陣に突入、玆に壯烈なる最期を遂げたのである。時に午前八時二十八分。

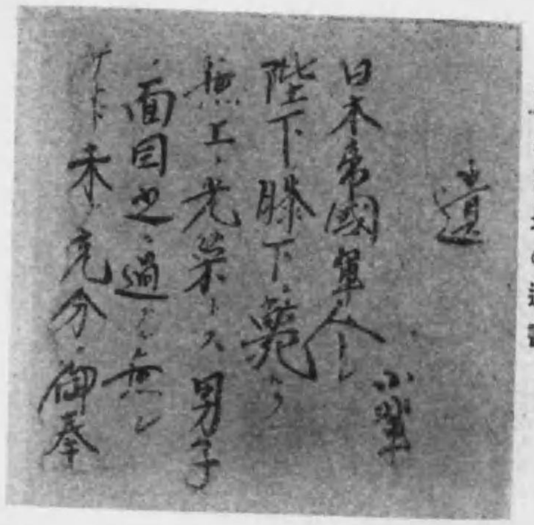
かくして眞に一騎當千のこの勇士と、その偵察員として人物技倆共に拔群の細川航空兵曹長を喪つたことは惜みても尙餘りがある。

海軍少佐吉澤政明略歷

原籍	愛媛縣南宇和郡西外海村內泊四〇三番地
現住所	吳市西三津田町番外一四號
生年月日	明治四十一年五月二日
入校	大正十五年四月九日　海軍兵學校入學
現官任用	昭和十二年九月二十二日　任海軍少佐

一四、肉彈機勇士の遺書二通

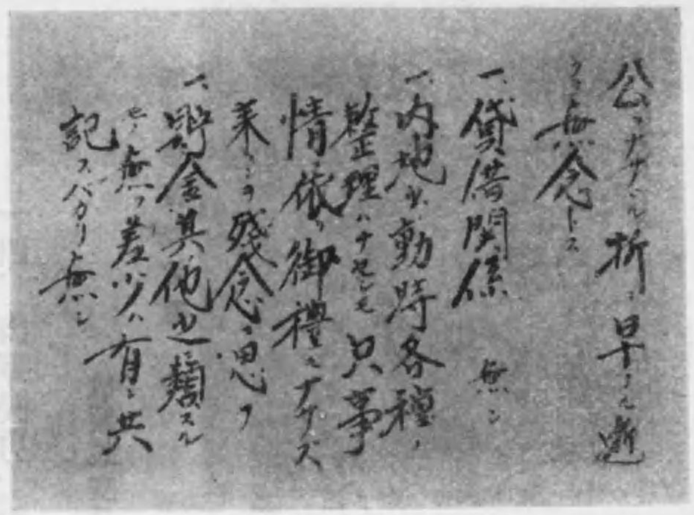
故原航空兵曹長と故中山一等航空兵曹


遺書
日本帝國軍人ハ
陛下ノ勝下ニ死ス
無上光榮トス男子
面目之ニ過ギ無シ
本元分御奉

原兵曹長の遺書

故海軍航空兵曹長原輝光氏が、かの有名な肉彈爆擊、自爆戰術の始祖南野（安治大尉）機の操縱者であつたことは、世人の記憶に尙新たなる所であらう。

又故海軍一等航空兵曹中山榮氏（少年航空兵出身）は搭乘員故海軍二等航空兵曹永野忠藏氏と共に同じく肉彈機の勇士であり、去る九月四日廣東墓地（閘北・北西端、蘇州河東岸）敵砲兵陣地爆擊の際、不幸ガソリン・タンクに敵彈を受



け、火達磨となつたにも拘らず、見事急降下爆撃を敢行して敵陣地を粉碎すると共に、愛機諸共肉彈となつて壯烈なる戰死を遂げたものである。

この度兩勇士の遺書がその所屬航空隊から移牒されて來た。これを見ると兩勇士決死出陣の覺悟のほどがうかゞはれ、その烈々たる義勇奉公の精神は脈々として皇軍將兵の胸奥に傳へられ、永へに懦夫をして起たしむるの概がある。

原兵曹長の遺書

遺　　小輩

日本帝國軍人トシ

陛下ノ膝下ニ斃ルヲ無上ノ光榮トス男子ノ面目之ニ過グル無シ

サレド未ダ充分ノ御奉公ヲナサヾル折ニ早クモ逝クヲ無念トス

一、貸借關係　無シ

一、內地出動時各種ノ整理ハナセシモ只事情ニ依リ御禮モナサズ來リシヲ殘念ニ思フ

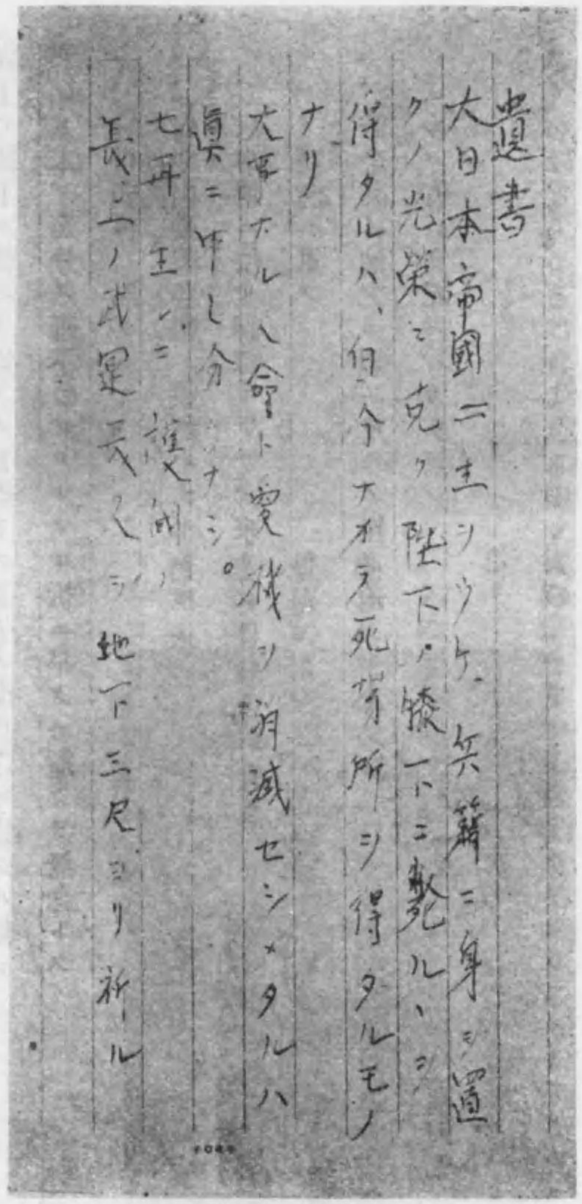
一、貯金其ノ他之ニ類スルモノ無ク差少ハ有レ共記スバカリ無シ

さくらばなちりぎはきよきものゝふの
くにゝさゝげしみはくちるとも

輝光

原兵曹長の遺詠

遺書


遺書
大日本帝國ニ生ヲウケ、兵籍ニ身ヲ置ク
ノ光榮ニ克ク陛下ノ膝下ニ斃ルヽヲ
得タルハ、自分ナガラ死場所ヲ得タルモノ
ナリ
大事ナル人命ト愛機ヲ消滅セシメタルハ
眞ニ申シ分ナシ。
七再生レテ護國ノ
長上ノ武運長久ヲ地下三尺ヨリ祈ル

中山兵曹の遺書

大日本帝國ニ生ヲウケ、兵籍ニ身ヲ置クノ光榮ニ克ク陛下ノ膝下ニ斃ルヽヲ得タルハ、自分ナガラ死場所ヲ得タルモノナリ

大事ナル人命ト愛機ヲ消滅セシメタルハ眞ニ申シ分ナシ

七再生レテ護國ノ

長上ノ武運長久ヲ地下三尺ヨリ祈ル

一五、戰の前夜「歡呼の聲に、、、」の思出に微笑む

故海軍二等兵曹藤井重夫君の絶筆

左記は去る八月十五日上海スイデン路に於ける激戰中、名譽の戰死を遂げた藤井兵曹が、その前夜微かなる光の下に認めて、本籍廣島縣神石郡油木町の實家兄弟に送つた絶筆である。惟ふにこれ皇軍將兵のすべてに共通する尊き心境であらう。玆に謹みて藤井兵曹の英靈に對して滿腔の敬意を表する。

「（前略）
度々のお便りを無二の忠言と信じ大いに自己を鞭撻し皆様の分も共に御奉公する覺悟、別段後事を依頼することなきも當陸戰隊に私の身の廻り品を入れたるトランクあり、其の中に先般侍從武官御差遣の砌御下賜の煙草を拜受したので謹みて保存しあり、尙昭和六年の從軍記章竝に勳記もあり保存方を賴む。
尙在籍中藤井政治樣御夫婦の御世話樣に相成り感謝に堪へず宜敷、前記のトランクの中のものを御禮に御渡し下さい。酒井友達、岩城二朗、高橋壽樣其の他區民一同樣にも宜敷く御申し下さい。兄上樣を始め益々御健勝にて將來益々奮鬪家運の隆盛に御盡力ありたい。靜かに戰の前夜國元の一人の母親の姿を思ふ。母上も年若く父を失ひ、赤貧の中に雄々しく我々子供の養育に、一家の生計に、一段の努力をはられ、しばしの安堵も出來得ず、我身を軍籍に入るゝや身の無事なる樣と殊の外の御心配感謝感激に堪へず、生前に於て大いに孝養を盡す念願なりしも本事件勃發し

國家の爲殉ずるは之が忠節であり、最大の孝養なる事を思ひ母上に於ても大いに御喜び下さることゝ信ず。
希くば今後共に永久に幸多き事を祈つて止みません。尙先般母上樣に申し上げたる通り、私の蓄へを以て伊勢參拜下さる樣、最期の私の願であり、寸志であります。愈々立たれし父上と面談出來得るのも今しばしの事であらう。くれぐれも落膽悲觀等あるまじく重ねて願上ます。では皆々樣の御健康を祈り上げます。御機嫌よう。

天に代りて不義を討つ　　忠勇無双の我兵は
歡呼の聲に送られて　　今ぞ出でたつ父母の國
勝たずば生きて歸らじと　　誓ふ心の勇しさ
靜かに思ひ出して微笑む。」

（終）

▼……二頁〃(イ)空の勇士、山内中尉の母〃中『八月十五日長驅渡洋爆撃の壯擧に參加し、南京空襲決行後』とあるを『八月十六日……句容……』と訂正

▼……三二頁〃(ロ)機關兵の目覺しき奮闘〃中『海軍一等機關兵岩崎精一』とあるを『海軍一等機關兵曹岩崎精一』と訂正して左の略歴を追補

海軍一等機關兵曹　岩崎清一略歴

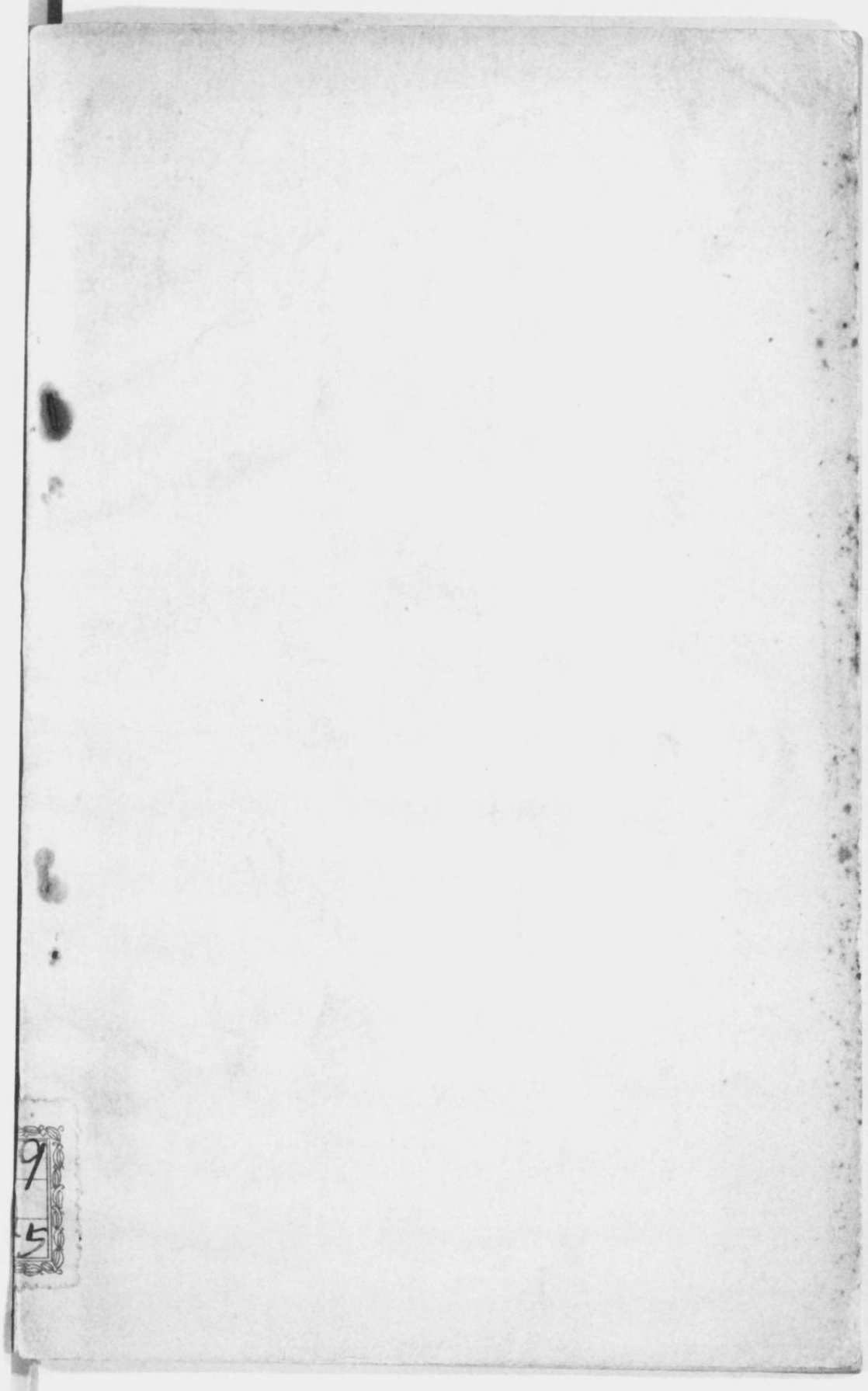
原籍	山口縣萩市大字山田第五七九八番地
現住所	吳海兵團
生年月日	明治四十年八月十日
入團	大正十五年六月一日　入團 昭和三年十一月四日　工機學校(普機)入校
現官任用	昭和十年十一月一日

▼……三四頁〃(ハ)陸兵の彈藥を運んだ機關兵〃中『海軍一等機關兵高山鶴松』とあるを『海軍二等水兵高山鶴松』と『海軍二等機關兵小林武雄』とあるを『海軍三等機關兵小林武雄』と訂正して左の略歴を追補

海軍二等水兵　高山鶴松略歴

原籍	石川縣石川郡内川村字蓮花ロノ三番地ノ一
現住所	吳鎭守府第〇特別陸戰隊兼第三艦隊司令部附
生年月日	大正四年四月二十五日
入團	昭和十一年一月十日　入團
現官任用	昭和十二年五月一日

海軍三等機關兵　小林武雄略歴

原籍	滋賀縣大津市布施屋町二八番地
現住所	軍艦伊勢
生年月日	大正四年八月八日
入團	昭和十一年六月三十日　入團
現官任用	昭和十一年十一月十五日

終